

打ち返し、つめを上、一本づめが向こう正面になるようにかざる。

▲台子、長板の総荘りでは、建水の中に、つめが上になるように入れてかざり、穂屋香炉と同じく扱う。(濃茶、薄茶とも)

吹貫の蓋置と

檜のさやの建水の扱い

吹貫の蓋置は、柄杓の柄を通して建水に仕込みます。それには、建水も、檜のさやとか棒の先などという、細長いものがふさわしいわけです。

写真は、檜のさやの建水に仕込んだ形で、



蓋置の吹貫
蓋置の吹貫
蓋置の吹貫

蓋置は竹の吹貫です。蓋置には銘があるので、それを正面(下側)にして、柄杓の柄を通してかけます。

(21)仕込んだ建水を持つには、左手で上から建水の上端を持つ。

(22)柄杓をかまえるには、親指、人さし指、中指の三本で蓋置を、他の二本で柄杓の柄を同時に上から握り持ち、

(23)そのまま手を返しながら、からだの正面に持ってきたら、右手で柄の切止を持ってかまえ、

(24)次に、左手で持った蓋置を、そのままの形で下まで下げてくる。

(25)右手の親指を手前から蓋置の輪の中にさし入れて、蓋置と輪の中に通した柄杓の柄とをいっしょに押え、人さし指と中指とで下側から受けて持つ。

左手は、蓋置からはなして、柄の節の下を持つ。

(26)次に、蓋置を柄に押しつけたまま、右の親指を輪の中から抜いて、蓋置を上から持ち直して、柄から下に抜きとる。

蓋置は定座に出して、柄杓を扱って引く。建水を進めるときは、運び出した手と同じく、上からつかみ持って出し入れする。

蓋置を扱ううえでの

一般的な注意

・竹の蓋置に、けしき(竹の斑など)があったり、花押(宗匠の書き判が漆でじかに書きつけてある)があれば、それを手前にして建水に仕込み、手なりに定座に出して、柄杓の柄がその正面の上を通るようにする。

・一般に、蓋置の拝見を所望された場合は、茶器、茶杓の下座(右のほう)に離して、少し手前寄りに出す。

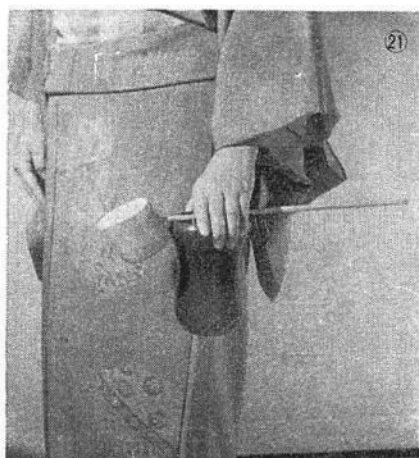
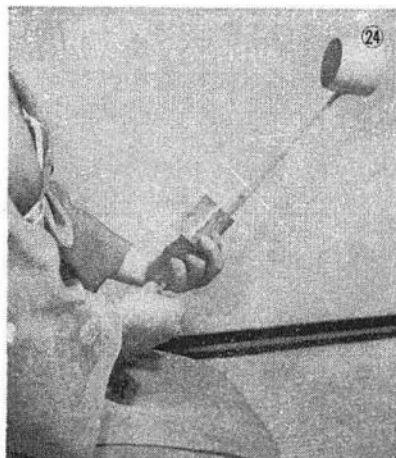
客が返す場合も、出された同じ位置に、向きだけ回して返す。

・茶の蓋置は、印のあるほうを正面に扱う。
・運び用と棚用の蓋置について。一般に運び点前には竹の引切が適当(白竹、青竹、在判のものなど)ですが、ただし、とり合わせによつては、柄杓といっしょに持ち帰るにさしつかえないものは、焼物なども使うことがある。

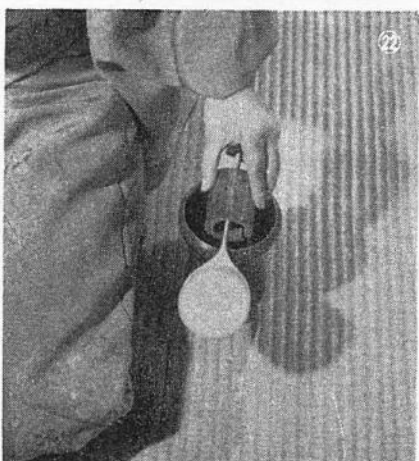
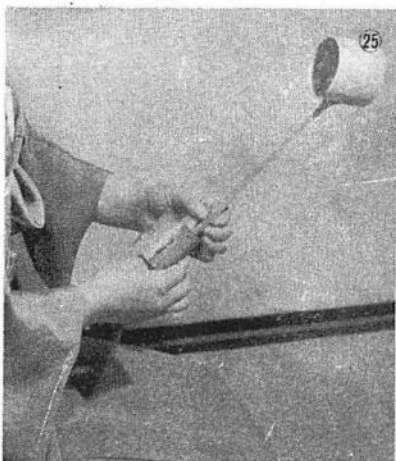
棚物点前には、白竹の蓋置は用いられません。

(ただし、在判物に限り用いる)

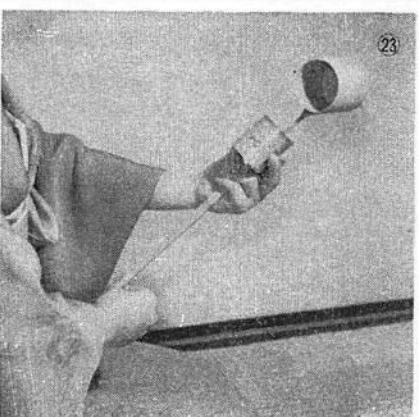
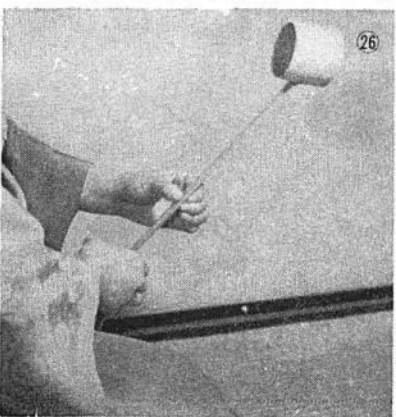
壁付の棚(台目の釣棚、釘箱棚)には、竹の蓋置がふさわしく、在判物が好まれます。



▲蓋置の種類は非常に多いので、すべてについて、ここで述べることはできませんが、特別な扱いのないものもあります。



中には、三つ人形と同じ扱いをする三猿さんざる、三輪さんりんなどもあります。三つ鳥居さんとりは形は似ていますが、鳥居の下をくぐるという意味を考え



て、一本足いちぼんあしを向こうに、二本足にほんあしの間から柄杓へしやくを引く——五徳ごとくと同じようになるわけです。(ただし、五徳のように上下を逆にしない)